



# 日光東照宮の宝物



縁起絵巻 関ヶ原

## 序

当宮の御祭神徳川家康公は、戦国乱世に生をうけ、幾多の困難を克服して天下統一を成し遂げ、世界に類なき江戸時代260年の太平の基を築かれました。公の薨去後、その御偉業を称えて東照宮が造営されると、朝廷からは例幣使が派遣され、将軍の社参があり、大名から庶民にいたる参詣が続き、数多くの敬神の奉納品が集まりました。

朝廷からは宣旨や宣命が授けられ、将軍家からは公の御在世品や「東照社縁起」・刀剣などが、大名家よりは様々な調度品が献納されました。それらは御本社や神庫の奥

深くに秘められ、御祭神の御手元品として保管された後、大正4年に300年祭の記念事業として建設された宝物陳列館、350年祭を機に昭和42年に建てられた宝物館を経て、平成27年に400年式年大祭記念事業として造営された「日光東照宮宝物館」に納められ、皆様の供覧に付されています。

本図録は1,200件に及ぶ収蔵品の中から、家康公ゆかりのとりわけ重要な御神宝を中心に採録したものです。これらの貴重な御神宝を通して、御祭神の御事績と東照宮への理解を一層深めていただければ幸甚です。

日光東照宮宮司  
同宝物館館長

稲葉 久雄

# もくじ

凡例 ..... 6

## 第1章

### 徳川家康公の御在世品 ..... 7

- ◇南蛮胴具足
- ◇瀬戸黒茶碗
- ◇熊時計
- ◇玉柏の石
- ◇研棒
- ◇硯
- ◇カップリ
- ◇小紋地葵紋付胴服
- ◇網代駕籠
- ◇唐船図腰屏風



## 第2章

### 家康公を語る宝物 ..... 15

- ◇徳川家康公御画像 (伝狩野了琢画)
- ◇徳川家康公御画像 (伝狩野山雪画)
- ◇於大の方像
- ◇徳川二十将図
- ◇家康公自筆書状
- ◇鷹狩の道中宿付
- ◇位記宣旨箱
- ◇従五位下位記
- ◇従一位位記
- ◇征夷大將軍宣旨
- ◇東照公御遺訓



## 第3章

### 東照宮を語る宝物 ..... 27

- ◇東照社縁起 (仮名本)
- ◇東照社縁起 (真名本)
- ◇大工道具および箱
- ◇宮号宣下の太政官符・宣命・位記
- ◇東照宮御祭礼行列図
- ◇日光山道中図絵



## 第4章

### 奉納された宝物 ..... 37

- ◇三十六歌仙扁額
- ◇寛永諸家系図伝
- ◇渾天儀 (大)
- ◇渾天儀 (小)
- ◇編鐘
- ◇鷹絵図屏風
- ◇鷹絵図扁額



## 第5章

### 東照宮の刀剣 ..... 49

- ◇太刀銘助真
- ◇太刀銘国宗
- ◇脇差銘備前国住長船勝光宗光
- ◇太刀銘吉房
- ◇太刀銘一
- ◇短刀無銘伝行光
- ◇金唐皮包太刀拵



徳川家康公 略年譜 ..... 62・63

## 第1章

# 徳川家康公の 御在世品

御在世品の第一は、関ヶ原の合戦に着用したと伝わる南蛮胴具足であろう。銃撃戦の時代に則して作られた甲冑である。

具足と笈形具足櫃の双方に桐紋が付いており、また大坂城に同形の具足櫃があったと記録されていることから、豊臣秀吉公からの拝領品の可能性もある。

意外と小さく感じられるが、戦に追われていた頃の家康公は痩せていて、「徳川家康三方ヶ原戦役画像」（徳川美術館蔵）には頬骨が張った姿が描かれている。

この章では、他に家康公周辺の愛用品を紹介するが、遺愛刀については別途第5章で扱うこととする。

### 凡例

- 一、各資料の員数は、複数点の場合のみ記載した。
- 一、掛軸、巻物、屏風等裱装されている物は裱具を除いた本紙の大きさを示した。

## ◇南蛮胴具足（重要文化財）

室町時代末期に火縄銃が渡来して、戦闘に銃が用いられるようになると、銃弾に耐えられる胴具足が作られるようになった。

本品を構成する桃実型の兜や、前面にしのごを立て、銀象嵌の線文で飾った2枚胴、2枚の板金を鋳留めにした肩当て等は、いずれも西欧甲冑をそのまま転用したもので、古式の頬当てや、桐紋散しの籠手を添えて、異国風かつ実戦向きに仕立ててある。



## 徳川家康公の御在世品

## ◇瀬戸黒茶碗

高さ 8.0cm、径 10.0cm

古瀬戸の逸品。慶長19年(1614)、大坂の陣に従軍し御膳奉行を務めた旗本新見正勝しんみまさかつが家康公より拝領した品で、後に当宮に納められた。



## ◇熊時計

高さ 17.7cm

熊が立ち上がった姿の置時計で舶来品。胴体が2つに割れて、中に機械が収められるようになっている。

文化9年(1812)の火災で焼損し、原形が損なわれているが、腹に穴が開いていることと、手の先に物を留めた跡があることから、文字盤を抱えていたことが推測される。時計と連動して、眼や口が動いた可能性もある。



左から玉柏の石、研棒、硯、カップリ

## ◇玉柏の石

長さ 21.0cm、幅 6.5cm

家康公御在世品。粘板岩の石片で、葉脈のように見える部分は珪石である。

## ◇硯

縦 17.3cm、横 9.0cm、厚さ 2.6cm

粘板岩製の素朴な遺品である。

## ◇研棒

長さ 18.0cm

家康公が薬を調製する際に使った道具。他に研棒2本と研鉢があったが、文化9年(1812)の火災で焼失した。

## ◇カップリ 2本

長さ 24.5cm (左)、25.5cm (右)

西洋から舶来したナイフで、2本とも鉄製。文化9年の火災で焼損した。





### ◇小紋地葵紋付胴服（重要文化財）

身丈 96.5cm、衿 51.0cm、襟幅 15.5cm

舶来品と目される大幅の平絹を黄唐草小紋染めにし、三葉葵紋を5つ付け、表裏共布の無双仕立てとした綿入れの胴服。胴服とは室町時代頃から小袖の上に羽織ようになった上着で、今日の羽織の原形である。現存する小紋染めの遺品としては最も古いものの1つで、こんどうもちまさ 我国の染織史上貴重な資料とされている。

元和元年（1615）、旗本の近藤用尹が大坂の陣の折に家康公から拝領したもので、後に当宮に納められた。



### ◇網代駕籠

前後の長さ 101.0cm、幅 70.0cm、高さ 107.5cm

屋根や壁代の表は模様を編み出したゴザ、裏は竹の網代。ゴザに使われた植物は東南アジア産と推定されている。腰廻りから底部にかけては竹の網代作りで、内側を漆塗りにしている。柱には三葉葵紋とかたばみ紋が金蒔絵で置かれているが、かたばみ紋は徳川家の旧紋との言い伝えがある。前方には小窓を設け、屋根は出入りの便をはかって片側が跳ね上がる仕組みになっている。

屋根と腰の部分に弾丸が貫通したような穴がある。



### ◇唐船図腰屏風 2曲1隻

総高 136.0cm、横 190.0cm、本紙縦 70.8cm、横 158.0cm

緑の部分には金蒔絵で葵紋を散し、上部は衣桁になっている。腰の部分には唐船の来航と中国人との交易の様子が描かれ、裏には木々と小鳥が描かれている。その作風から、狩野孝信画との説が近年有力になっている。

## 第2章

# 家康公を語る宝物

家康公御画像によって公の姿を紹介する。当宮には何点かの御画像があるが、ここでは凛々しい御姿と、特徴を誇張した御姿の2点を掲載する。併せて、生母於大の方像や徳川二十将図も紹介する。

家康公自筆の文書や朝廷から授けられた位記・宣旨は、家康公の生涯を辿る上で重要な資料である。

さらに、家康公の精神をよく表した「東照公御遺訓」もこの章で紹介する。公の御生涯と照らし合わせながら味読し、人生の糧としたい名文である。



## ◇徳川家康公御画像（伝狩野了琢画）

縦 64.5cm、横 39.5cm（除 描き袂具）

描き袂装仕立。<sup>かのりのりようたく</sup>狩野了琢画と伝わるが、疑わしい。  
尊崇の対象として描かれた東照大権現像である。  
衣冠束帯姿で、他の家康公御画像に比べて凛々しい  
表情をしている。

背面に「文政甲申歳四月凌雲院現住大僧正深信開  
眼」と墨書されており、文政7年（1824）に上野の某寺  
院に祀られたようだが、明治元年（1868）の上野戦争  
の折に流出し、後に当宮に納められた。



## ◇徳川家康公御画像（伝狩野山雪画）

縦 97.0cm、横 40.5cm

かのうきんせつ  
狩野山雪画と伝わるが疑わしい。

左右の狛犬と共に御帳台の上に衣冠束帯で座す姿は、尊崇の対象として描かれた典型的な東照大権現像である。目・鼻・耳などの面相が誇張され、特徴のある画像となっている。これに酷似した御画像が栃木県立博物館や滋賀県立安土城考古博物館にもあることから、同一の粉本を使って複数の御画像が製作されたことが分かる。





## 家康公を語る宝物

## ◇於大の方像

縦 70.6cm、横 32.7cm

家康公の生母於大の方おだいの晩年の姿を描いた御画像。11代将軍家齊公に仕えた沼津藩主水野忠友みずのただともが刈谷の楞嚴寺蔵りょうごんじの原画を模写したもの。



## ◇徳川二十将図

縦 116.8cm、横 45.5cm

絹本着色。伝狩野永納画。  
家康公を中心に譜代の二十将、  
①水野忠重・②松平家忠・  
③安藤直次・④本多忠勝・  
⑤酒井忠次・⑥平岩親吉・  
⑦米津勝政・⑧榊原康政・  
⑨井伊直政・⑩鳥居元忠・  
⑪大久保忠世・⑫大須賀康高・  
⑬大久保忠佐・⑭高木正次・  
⑮渡部守綱・⑯蜂屋親同・  
⑰戸田忠次・⑱渥美勝吉・  
⑲内藤正成・⑳服部正成を  
描く。秋元家旧蔵。

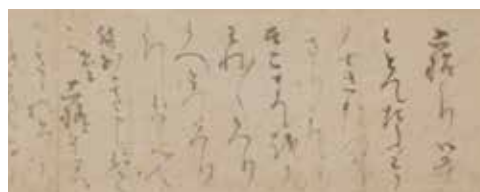


## 家康公を語る宝物

## ◇家康公自筆書状

縦 15.6cm、横 76.0cm

秀忠公の家臣某に宛てた家康公の書状。文禄2年（1593）12月、豊臣秀吉公の居城伏見を目指して西上した世子秀忠公一行が、折から他出中であった秀吉公の勧めによって途中で滞まっているとの報を耳にした家康公が、「秀吉の言に甘えず速やかに上洛すべし」と命じたものである。

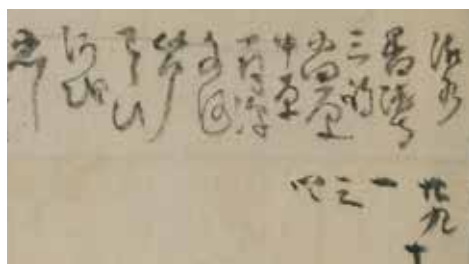
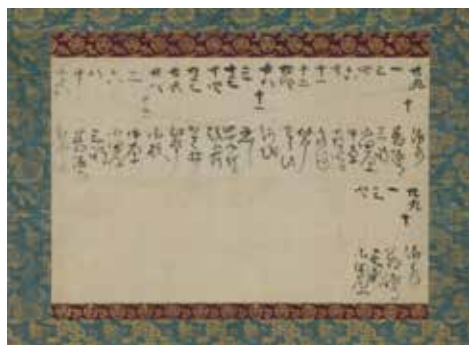


## ◇鷹狩の道中宿付

縦 30.3cm、横 46.5cm

戦国武将は鷹狩によって兵を訓練したり、地形や民情を視察したと言われるが、家康公も大いにこれを好んだ。

元和元年（1615）、大坂の陣の後、駿府に帰った家康公は、9月下旬に駿府を発して江戸に向かい、12月中旬に駿府に帰るまで各地で鷹狩りを行ったが、本資料はその出立に先かけて自筆で認めた日程表である。



## ◇位記宣旨箱（中箱）

縦 61.6cm、横 41.2cm、高さ 42.7cm

家康公の官歴に関する位記（23通）・宣旨（30通）など朝廷から授けられた文書類を納めた箱。外箱・中箱・内箱の3重になっており、特に中箱には金梨地に蒔絵の葵紋を散し、七宝の優美な金具を取り付けて、工芸の粋を凝らしている。外箱は黒漆地に蒔絵の葵紋を付し、内箱は桐の素木製である。





## 家康公を語る宝物



## ◇従五位下位記

縦 26.5cm、横 132.5cm

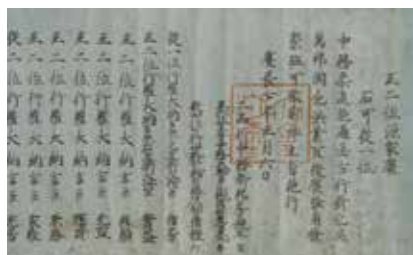
家康公が永禄9年  
(1566)に朝廷から賜わ  
った最初の位記。



## ◇従一位位記

縦 26.5cm、横 132.5cm

家康公は永禄9年(1566)  
12月29日、25歳で従五位下  
三河守に叙任され、以後、年  
を追って位階は昇進し、慶長  
7年(1602)1月6日、62歳の  
時に、従一位に叙せられ、こ  
れが最高位となった。

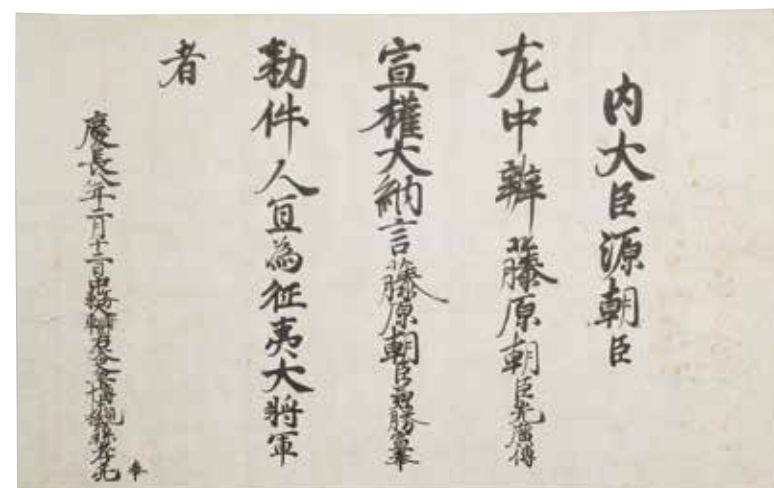


## ◇征夷大將軍宣旨

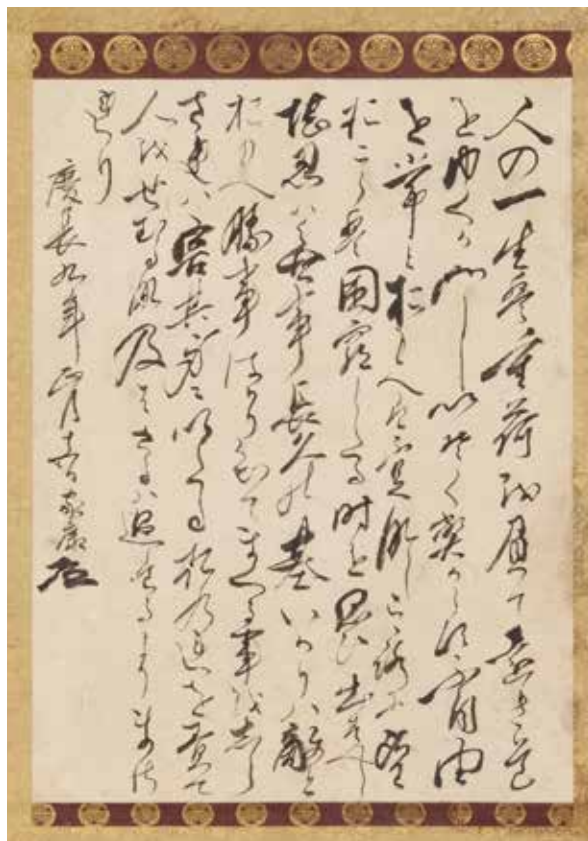
縦 37.8cm、横 60.7cm

徳川家康公が関ヶ原の合戦に勝利した  
ことで、徳川氏が政権を担うにふさわしいこ  
とが衆目の一致するところとなった。

慶長8年(1603)2月12日、家康公は後  
陽成天皇から征夷大將軍の宣旨を賜わり、  
同時に源氏長者、右大臣、淳和・奨学院兩  
別当に任ぜられ、牛車・兵仗を許された。こ  
こに、公は武家の棟梁として認められ、幕  
府を開くこととなった。







### ◇東照公御遺訓

縦 46.0cm、横 34.6cm

家康公の御遺訓としてよく知られているが、後世に執筆されたものである。しかし、文の内容は国内の統一を成し遂げた家康公の精神をよく表わしており、公の生涯から導かれた教訓として読むことができる。

人の一生は重荷を負て遠き道を行くが如し  
いそぐべからず  
不自由を常とおもへば不足なし  
こころに望おこらば困窮したる  
時を思ひ出すべし  
堪忍は無事長久の基  
いかりは敵とおもへ  
勝事はかり知てまぐる事をしらすれば  
害真身にいたる  
おのれを責て人をせむるな  
及ばざるは過たるよりまきれり  
慶長九年正月十一日 家康（花押）

## 第3章

# 東照宮を語る宝物

東照宮創建を語る資料として最も重要な「東照社縁起」を中心に紹介する。御祭神家康公の御生涯と東照宮創建に関わる重要な場面を抽出した。

正保2年(1645)の宮号宣下の文書も大切な資料である。宮号は皇祖神をはじめとする御皇室の特別崇敬社にのみ許された称号で、この後、正保4年(1647)から幕末に至るまで、朝廷から日光例幣使が派遣された。江戸時代に例幣使が派遣されたのは伊勢神宮と日光東照宮のみであり、東照宮は神宮に次ぐ格式が認められたことになる。

社殿造営に関わる大工道具箱や渡御祭の様子を描いた祭礼行列図も、東照宮を知る上で欠かせない資料である。

## 東照宮を語る宝物

## ◇東照社縁起（仮名本） 5巻 （重要文化財）

家康公の御生涯や、東照社の創建、日光山の縁起を綴った絵巻物。天海の草案を、青蓮院宮尊純法親王が和文に改め、これに狩野探幽が絵を付けた。詞書25章のうち、1章と18章は後水尾上皇の御宸筆、他は親王・門跡・公家らの筆である。寛永17年（1640）に完成し、同年4月の家康公25回神忌に東照宮に奉納された。制作を推進したのは、3代将軍家光公で、祖父家康公への崇敬の念が伺える。



第1巻 冒頭 後水尾上皇御宸筆



表装



金梨子地葵紋散箱



## ◇縁起絵巻 御誕生

父母の祈願が叶い、天文11年（1542）12月26日、三河国の岡崎城で家康公（幼名は竹千代）が誕生する。



## ◇縁起絵巻 因地

家康公10歳の折、安倍川の河原での石合戦を見て、結束して戦う少人数側の勝利を言い当てる。家臣に抱かれているのが家康公。



## 東照宮を語る宝物

## ◇縁起絵巻 大坂の陣

関ヶ原の合戦の勝利で政治的実権を得た後、慶長20年(1615)に大坂の陣に臨み、国内を統一。以後徳川の平和がもたらされた。



## ◇縁起絵巻 御他界

家康公の病が重くなり、元和2年(1616)4月17日、駿府城にて75歳の生涯を終えられる。御尊骸は久能山に神葬された



## ◇縁起絵巻 日光道行

家康公薨去後1年を経た元和3年(1617)、御遺言により御尊骸は久能山から日光に改葬され、新たに造営された東照社に祀られた。



## ◇縁起絵巻 御社参

東照宮大造替後の寛永17年(1640)4月、例祭に合わせて3代将軍家光公が社参し、将軍着座の間に坐して、儀式を聴聞する。

## 東照宮を語る宝物

## ◇東照社縁起（真名本） 3巻 （重要文化財）

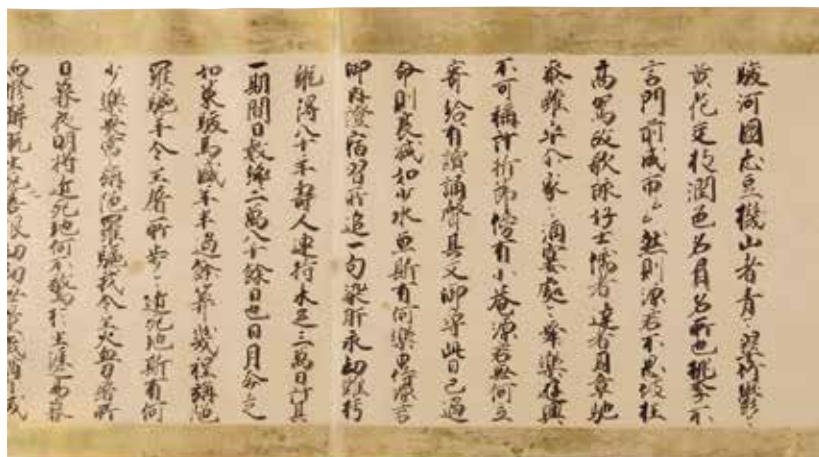
3代将軍家光公の命により、東照宮鎮座の縁起を天海が漢文で撰したもの。上巻は寛永13年（1636）後水尾上皇の御宸筆。中・下巻は親王・公家が執筆し、同16～17年（1639～40）に至って完成した。



金梨子地葵紋散箱



表装



上巻 冒頭 後水尾上皇御宸筆



## ◇大工道具および箱 （国宝）

縦30.8cm、横84.0cm、高さ20.0cm

寛永13年（1636）、寛永大造替の上棟祭に用いられ、その後、同造替の棟梁を務めた甲良豊後宗広が奉納した。

中には手斧、曲尺2本、墨つぼ、墨さしなどの大工道具が収められ、箱には、金梨子地に龍と唐獅子の金銀高蒔絵が施されている。また蓋裏には奉納銘が記されている。

江戸時代の大工道具の遺品の内、最も古く装飾が豊かであることから、東照宮本殿の付属品として国宝指定を受けた。



蓋裏の奉納銘

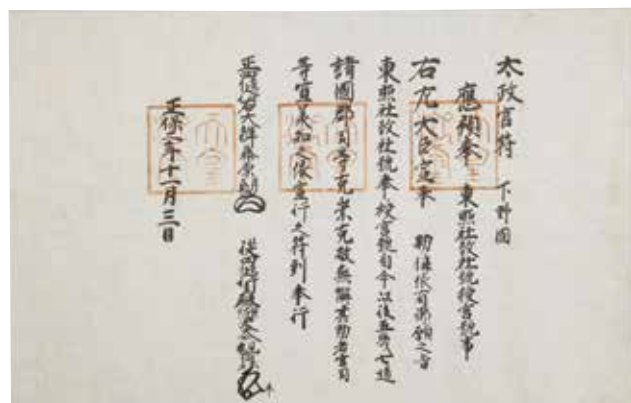


# 東照宮を語る宝物

## ◇宮号宣下の太政官符・宣命・位記

官符 縦 38.3cm、横 60.0cm  
 宣命 縦 38.3cm、横 50.0cm  
 位記 縦 29.5cm、横 44.0cm

東照宮は創建当初は東照社と称したが、3代将軍家光公の奏請により、正保2年(1645)11月3日、後光明天皇より宮号が宣下された。同日9日、勅使今出川経季卿いまでがわつねすゑが宮号宣下の太政官符と宣命、正一位の位記を江戸に伝え、次いで日光に赴き、17日に東照宮に奉納した。



大政官符



宣命



位記

## ◇東照宮御祭礼行列図 2巻

かのうつねのぶ  
 狩野常信筆。東照宮春秋の渡御祭(百物揃千人武者行列)の行装を描いたもので、3基の神輿を中心に、甲冑武者・楽人・稚児・鷹匠などの所役が克明に描かれている。

筆者の常信は狩野五家中、木挽町狩野家に属し、父尚信の画法を学び、父の没後は探幽の薫陶を受けた。慶安3年(1650)、父の後を継いで幕府の奥絵師となり、宝永6年(1709)には法印に叙せられた。





## ◇日光山道中図絵 9帖

将軍が日光社参の際に通る御成道の絵図面である。江戸城から日光山に至る街道の景観を克明に描き、日光山の場面は、東照宮・大猷院をはじめ支院や周辺の町家、さらにははかなたの山々まで収めた鳥瞰図になっている。

御泊・御小休・御供飯などの書き込みがあり、文政8年(1825)に予定されていた11代将軍家斉公の社参に備えて制作されたものと考えられている。



神田橋 (第1帖)



日光山内 (第9帖)

## 第4章

## 奉納された宝物

将軍家・幕府・大名家からの奉納品を紹介する。将軍家は三十六歌仙扁額を納めたと考えられるほか、慶賀の折には刀を奉納したが、刀については次章で扱う。幕府からは徳川家家臣の系図その他が奉納された。

大名家からも渾天儀や編鐘などが納められたが、特に重要なものは鷹絵図扁額であろう。この扁額は護摩堂(現祈祷殿)に掲げられ、拝殿に掲げられた三十六歌仙扁額と共に社殿を荘厳した。両扁額は東照宮における特徴的な装飾品と見なされ、家康公が鎮まる社殿に鷹の扁額と歌仙額が掲げられている様子を描く御画像(徳川記念財団蔵)も現存する。

## ◇三十六歌仙扁額 36枚

縦 50.0cm、横 37.0cm

奈良・平安時代の優れた歌人の姿を描き、代表作の和歌1首を記した額。将軍家が製作を進めたものと考えられる。和歌の文字は後水尾天皇の御宸筆、絵は土佐光起の筆と伝えられてきたが、画風から見て、複数の狩野派の絵師が描いた可能性も指摘されている。和歌は世尊寺流の書法に則って記されている。

元は東照宮拜殿に掲げられていたが、明治期に下ろされ、現在はこれらの写しが掲げられている。

## 〈柿本人麿〉

扁額は御神前で歌合せをするがごとく、左側の18枚と右側の18枚が向き合うように掲げられた。左の筆頭は柿本人麿、右の筆頭は紀貫之である。

ほのぼのとあかしのうらのあさ霧に  
しま(が)くれ行(く)舟をしぞおもふ



## ◇三十六歌仙扁額

縦 50.0cm、横 37.0cm

## 〈小野小町〉

各地の神社に遺された歌仙額と比べて、当宮の歌仙額は女性像がとりわけ美しく描かれており、筆者の技量を伺わせる。

わびぬれば身をうき草のねをたへて  
さそふ水あらばいなむとぞ思ふ





#### ◇寛永諸家系図伝 186冊 (重要文化財)

幕府が編纂した最初の大名・旗本諸家の系譜。寛永18年(1641)、將軍家光公の命により、太田資宗を責任者とし、林羅山、その子春齋を総裁として編纂を進め、同20年(1643)に完成した。

真名(漢文)本と仮名本が作られたうち、正本である真名本が寛文9年(1669)に幕府より東照宮に奉納された。仮名本は現在内閣文庫に納められている。



#### ◇渾天儀(大) (重要文化財)

総高 110.0cm、地平環径 78.0cm

天動説に基づいた天球の模型で、天体の運行を測るために用いられた器機。六合儀、三辰儀、四遊儀と呼ばれる3種類の輪の集まりを組み合わせ使用する。

若狭小浜藩士石原信由いしはらのぶよしが京都の工人に製作させ、寛文9年(1669)12月、同藩主酒井忠直が幕府に献上。翌年2月に東照宮に奉納された。



## 奉納された宝物

## ◇渾天儀（小）

総高 37.3cm、地平環径 27.3cm

地平環の裏に「延宝三年（1675）乙卯秋、安井算哲 経営小渾天儀 金銀銅工 津田友正作之」の銘文がある。貞享暦を作った安井算哲（渋川春海）が設計して製作させた渾天儀のうち現存する唯一の作例。公家の伏原宣幸ふしはらののぶゆきを通して靈元天皇の勸覧に供された後、東照宮に奉納された。



## ◇編鐘

総高 98.0cm、総幅 118.0cm

鐘の口径 8.6cm

編鐘は古代中国の打楽器。本品は難波津（現大阪）の工人の作で、寛文13年（1636）4月17日、板倉重宗いたくらしげむねにより奉納され、享保2年（1717）には靈元法王の勸覧に供された。

黄銅製の鐘16個には、それぞれ金象嵌で銘文が施されており、撥には鯨骨が用いられている。



## 奉納された宝物

## ◇鷹絵図屏風 6曲1双

本紙は縦 128.5cm、横 53.0cm

若狭国敦賀の鷹絵師2代目  
橋本長兵衛画の屏風で、寛永  
13年(1636)に若狭小浜藩主  
酒井忠勝が奉納した。家康公  
が鷹狩りを好まれたことに因む  
奉納と察せられる。架鷹図を  
各扇毎に貼り付け、押絵貼りに  
仕立てている。

押絵の内1枚は駿河台狩野  
家に属する狩野洞白愛信の補  
筆である。



## 奉納された宝物

## ◇鷹絵図扁額 12枚

縦 110.0cm、横 59.0cm

2代目橋本長兵衛画の扁額で、寛永13年(1636)に若狭小浜藩主酒井忠勝が鷹絵図屏風とともに奉納した。板地に金箔を押し、鷹狩り用の鷹を架につないだ様子を描く。

本品は御宝蔵に納められ、後に護摩堂(現祈祷殿)に掲揚されて神前を荘厳した。



## 第5章

## 東照宮の刀剣

東照宮の刀剣は、徳川家康公の御在世品と、将軍家等からの奉納品、火災で焼損したものの3つに分けられる。

御在世品の白眉は太刀銘助真(国宝)と同国宗(国宝)で、両者は拵が優れていることでも知られている。他に脇差備前国銘長船勝光・宗光合作(重文)がある。

奉納品は御神忌や慶賀の折に将軍家や御三家・大名家から奉納されたもので、太刀銘吉房(重文)、短刀無銘伝行光(重文)等の名品がある。

焼損分は文化9年(1812)の火災が宝蔵(銅神庫)に延焼したことによるもので、その一部は現代の刀匠により再刃復元されている。

## 東照宮の刀剣

◇太刀 銘 助真 附  
打刀拵 (国宝)

長さ 71.2cm、反り 2.9cm

大丁子乱れの刃紋が華やかで、「日光助真」として名高く、助真の代表作に挙げられる。拵の柄は黒鮫の革で包んだ上に藍革を巻き、鞘は黒塗である。この拵は家康公の好みに合わせて作られたと考えられ、「助真拵」と呼ばれて珍重された。

作者の助真は鎌倉時代中期の人。備前国の福岡1文字派から出て、後に鎌倉に移ったと言われる。

本品は加藤清正が家康公に進呈したものである。



## 東照宮の刀剣

◇太刀 銘 国宗 附  
糸巻太刀拵 (国宝)

長さ 81.7cm、反り 3.3cm

刃文は丁子乱れ、表裏に棒樋を刻んでいる。丈が長く身幅も広く堂々とした姿で、国宗において第一等の作との定評がある。拵の鞘は金梨子地桐紋散しの蒔絵。柄と鞘を浅黄の錦で包み、濃茶の平打の糸で巻く。我国の糸巻太刀拵の中で最優品の一つとされている。

作者の国宗は鎌倉時代中期の備前の名工で「備前三郎」と称される。

本品は池田輝政が家康公に進呈したものである。





## 東照宮の刀剣

## ◇脇差 銘

備前国住長船勝光宗光

備中於草壁作

文明十九年二月吉日

附 合口拵

(重要文化財)

長さ 53.7cm、反り 1.6cm

文明19年(1487)の作。刃文は互の目乱れ、表裏に棒樋と連れ樋を刻み、片面に三鈷形の剣を彫る。拵の鞘は金梨子地。柄は黒鮫の革で包んだ上に茶の平打の糸を巻く。鐔はない。

作者の勝光と宗光は兄弟で、室町時代中期の備前国長船派の名工。家康公御在世品である。





## 東照宮の刀剣

◇太刀 銘 吉房 附  
糸巻太刀拵  
(重要文化財)

長さ 72.4cm、反り 3.0cm

刃文は丁子乱れ、乱れうつりがあざやかである。拵の鞘は金梨子地三葉葵紋散しの蒔絵。柄と鞘を金欄で包み、薄茶の平打の糸で巻く。

作者の吉房は鎌倉時代中期の備前国福岡一文字派の代表的な名工。

本品は寛永13年(1636)の第21回御神忌に尾張の徳川義直公が東照宮に奉納した後、一旦幕府に返納され、文化12年(1815)の第200回御神忌に11代将軍家齊公が改めて奉納したものである。



## 東照宮の刀剣

◇太刀 銘 一 附 糸巻  
太刀拵 (重要文化財)

長さ 75.7cm、反り 2.6cm

刃文は丁子乱れ、丈が長く身幅もあり堂々としている。拵の鞘は金梨子地三葉葵紋散しの蒔絵。柄と鞘を紺の平打の糸で巻く。

銘は一の文字のみ刻まれている。作者は不詳だが、鎌倉時代中期の備前福岡一文字派の名工の手になるものである。

家康公御在世品と伝えられ、春秋の渡御祭の折には社家が本品を背負って行列に加わった。



## 東照宮の刀剣

◇短刀 無銘 伝行光 附  
合口拵 (重要文化財)

長さ 26.0cm

刃紋は互の目乱れ。拵の鞘は白鮫の革、蠟色の塗り鞘がつく。無銘だが、作者は鎌倉時代末期の相模国の行光ゆきみつと鑑定されている。

明暦2年(1656)に4代将軍家綱公が奉納したものである。



## ◇金唐皮包太刀拵

柄の長さ 29cm、鞘の長さ 81.5cm

柄は黒塗りの鮫皮包み。鞘は金唐皮で包み、金と銀とで着彩した文様を施し、茶色の糸で巻く。この太刀拵は御在世品の1つであるが、これに入る刀身は江戸時代から既に存在していない。





# 徳川家康公 略年譜

天文11年 (1542) 1才

●12月26日、三河岡崎城に生まれる。幼名竹千代。

天文16年 (1547) 6才

●父広忠が織田信秀と戦い、今川義元の援助を受けるため、竹千代を人質に出す。駿府への途中、織田氏に奪われて尾張に送られる。

天文18年 (1549) 8才

●尾張より岡崎に帰った後、駿府の今川義元の許に赴く。

永禄3年 (1560) 19才

●桶狭間の戦いで今川義元が戦死。今川氏から独立。

永禄4年 (1561) 20才

●織田信長と和し、翌年、清洲城にて同盟を結ぶ。

永禄7年 (1564) 23才

●三河一向一揆を平定。

永禄9年 (1566) 25才

●徳川氏へ復姓する勅許を得る。

元亀元年 (1570) 29才

●浜松城に居城を移す。姉川の戦いで、信長を援け、朝倉・浅井両氏の軍を破る。

元亀3年 (1572) 31才

●三方ヶ原の戦いで、武田信玄に大敗。

天正3年 (1575) 34才

●長篠の戦いで、信長とともに、武田勝頼を破る。

天正10年 (1582) 41才

●信長が本能寺で斃れたことを知り、堺から岡崎に帰る。

天正12年 (1584) 43才

●小牧・長久手の戦いで、織田信雄を援け、羽柴秀吉を破る。

天正14年 (1586) 45才

●大阪城にて秀吉に臣従する。浜松城から駿府城に移る。

天正18年 (1590) 49才

●秀吉の小田原征伐に参加。北条氏滅亡後その旧領関東6カ国を領有。江戸城に入る。

慶長5年 (1600) 59才

●関ヶ原の戦いに大勝利、天下の実権を握る。

慶長8年 (1603) 62才

●征夷大將軍の宣下を受け、江戸に幕府を開く。

慶長10年 (1605) 64才

●將軍職を秀忠公に譲る。

慶長12年 (1607) 66才

●江戸城から駿府城に移る。

慶長19年 (1614) 73才

●方広寺大仏殿の鐘銘問題から大坂冬の陣が起こる。

元和元年 (1615) 74才

●大坂夏の陣で、豊臣氏が滅亡。天下統一を完了。

元和2年 (1616) 75才

●鷹狩に赴いて発病し、駿府城に帰って治療。太政大臣に任ぜられる。駿府城にて薨去。久能山に神葬される。

元和3年 (1617)

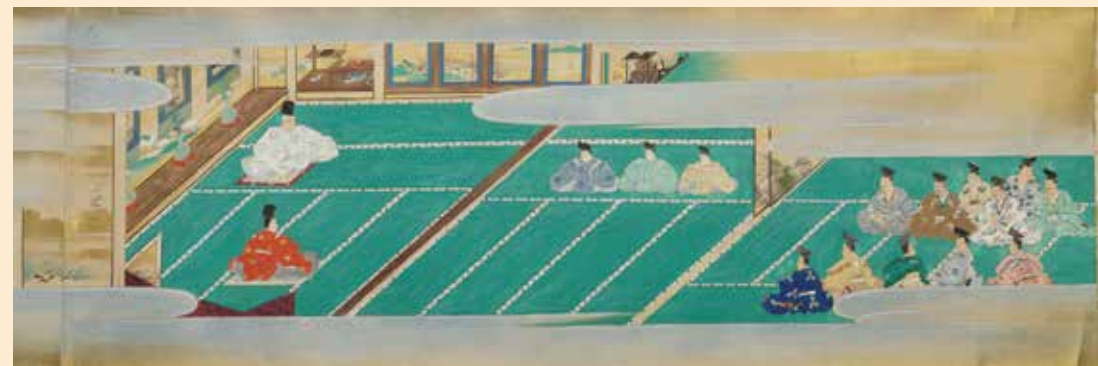
●日光に改葬される。日光東照社の正遷宮が行われる。

寛永13年 (1636)

●3代將軍家光公によって、日光東照社の社殿が造替される。

正保2年 (1645)

●東照社に宮号が宣下され、東照宮となる。



縁起絵巻 相国宣下

---

にっ こう とう しょう ぐう ほう もつ  
日光東照宮の宝物

平成27年3月13日 初版一刷発行

編集・発行

日光東照宮社務所 宮司 稲葉 久雄

〒321-1431 栃木県日光市山内 2301

電話 0288-54-0560

撮影 竹本春二・日光東照宮

制作 下野新聞社

---

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。